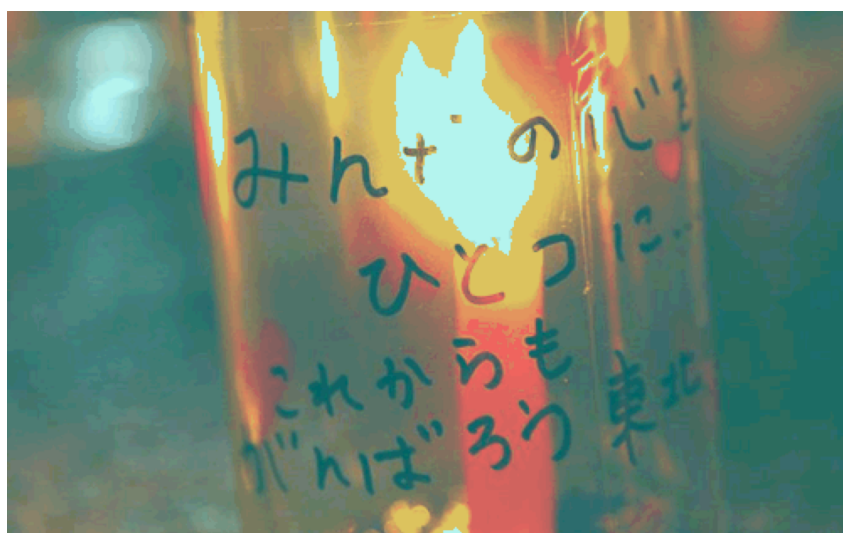


朝日連峰 大朝日岳山麓

ハチ蜜の森から

No.35



東日本大震災追悼・復興祈念事業「復興の祈り」(山形市文翔館前)
キャンドルリンクネットワークの仲間と製作・点灯会に協力しました。
福島から避難している親子の皆さんも含め、およそ 360 人の皆さんが
駆けつけて下さいました。 2013. 3. 11 写真/大類正典さん

ハチ蜜の森

採蜜ができるトチやキハダをはじめマンサク、コブシ、カエデ、ヤマザクラ、ドウタン、ウワミズザクラ、ミズキ、クリ、ハクウンボク、タラ、コシアブラ、センノキ、ヌルデ、クズ、イタドリ…と、数多くの蜜源植物を抱える森のこと。ハチ蜜の森キャンドルはその森の入口にあります。

編集発行

ハチ蜜の森キャンドル

代表 安藤 竜二

☎990-1573 山形県朝日町立木 825-3

☎・FAX 0237-67-3260

メール mitsurou@alto.ocn.ne.jp

ホームページ mitsurou.com/

ツイッター twitter.com/ryuzi_andou

fb facebook.com/hachimitsunomori

発行日 2013年5月15日

蜜蝋色の魅力

なにしろ蜜ロウソクの色に焦がれている。炎が蜜蝋の色を美しく透かし出すのだ。

溶け口が広がるにつれ、黄色や橙色の蜜蝋の色が、厚みや温度により鮮やかなグラデーションを描く。光がやっと届く下部は、深く鈍い色だが、炎に近づくにつれ明るい色に変化する。赤っぽい炎と相まって、全体が優しく静かに薄橙色の光を放つのである。

その絶妙な色は、じわじわと心に染み、部屋全体もその優しい光に包まれると、私はいつも安堵な時間を手に入れることができる。優しく、暖かく、嬉しくて、ありがたくて、ちょっと恐ろしくて、ちょっと切ない。私の心も様々なグラデーションを描き出す。

だが、悲しいことに、この色は実に儂い。めずらしいからと飾ってしまえば、気付かぬうちにしだいに退色が進み、小一ヶ月程でその変化に気付くことになる。トーンが落ちて、茶系や白系の色になってしまうのだ。

最大の原因は紫外線である。太陽の光はもちろん、電気照明すらも色を破壊する。工房では、種類ごとに一本を見本のために裸にしているが、日ごと色あせして行く様子を見る度に心は痛む。さらに、包装しているものでも二、三ヶ月経てば、やはり悲しい色に変わり始める。

儂いからこそ、さらに愛おしくなるのだらうか。蜜蝋と四半世紀も向き合ってきたのに、未だこの色をもたらす蜜蝋に惹かれ続けている。もちろん私のみならず、使い続けて下さるお客様は、同じように魅了されている。



大朝日岳山麓の養蜂場

そして、それはこの蜜蝋が、ミツバチと森がもたらしたものであることを知る時、益々愛おしいものになるのだ。

蜜蝋は、ミツバチの巣のことである。三代目を継ぐ私の弟は、200 群を持つ大規模養蜂家。初夏の採蜜期は私も手伝い、収穫した巣はありがたくいただいている。

ただ、ハチミツは一群れから年間 50kg 以上も収穫できるが、蜜蝋はたった 500g 程しか採れない。私は、地元朝日連峰や月山をはじめ、奥羽山系各地の大規模養蜂家からも仕入れて製造している。

収穫する巣は、採蜜時に切り取る「蜜蓋」が主となる。これは、蜜が巣穴に満タンになると、保存のためにろうで密封する蓋のこと。これがあると、遠心分離機でまわしても蜜は出てこないの、蜜刀と呼ぶ長い包丁で切り取るのだ。また、巣枠からはみ出して作られた「ムダ巣」も大切な収穫物となる。

収穫した巣は、すぐにお湯で煮る最初の精製が行われる。ムダ巣には、幼虫が入っている場合もあるので、腐る前に取り除く必要がある。また、巣そのものにはカビも生えるし、巣虫と呼ぶ蛾の幼虫が食い荒らし、排泄臭を付けることもあるのだ。

お湯で洗われた巣は、一晩経てば分離し、浮かんで固まった蜜蝋だけを取り出すことができる。色が凝縮され、初めて鮮やかな黄色や橙色を見ることが出来る楽しみな作業だ。

色あせ・変色は、この収穫・精製段階でも起こる。古い巣の収穫、収穫後の放置、精製

時の温度の上げ過ぎなどが原因となる。まちがった精製方法により、茶系や白系も本来の色だと思いこんでいる養蜂家も多い。実家の蜜蝋はもちろん、ご理解いただき売って下さる養蜂家の皆さんの蜜蝋も、ほとんどがきれいな黄色やオレンジ色をしている。

製造を始めた頃、「蜜蝋の色は、花粉の色が表れる」と、玉川大学ミツバチ研究施設の故吉田忠晴教授に教わったことがある。ミツバチは、ハチミツを食べて体内で蝋に変化させ、腹部から分泌し巣材とする。その食べるハチミツの中に溶け込んでいる花粉の色が、蜜蝋の色として表れるのだそうだ。

たしかに、森の中で最も多くのハチミツをもたらすトチノキの花粉は濃い橙色をし、その季節の巣は薄橙色をしている。そして蜜蝋は、きれいな橙色になる。同じように、黄色の花粉のキハダやニセアカシアの季節は、黄色の蜜蝋が収穫できる。蜜蝋の色は、蜜源植物がもたらした天然色なのである。

さらに驚くことに、ミツバチは食べた蜜の量に対し分泌できる蜜蝋の量は、たった 10 分の 1 程なのだそうだ。ミツバチは、小さじ一杯のハチミツが一匹の生涯の働きとされる。蜜蝋は、まさに小さなミツバチがもたらした命の結晶といえる。

トチノキが葉を橙色に色づかせる季節、雑誌の取材があり、朝日連峰大朝日岳山麓に広がる原生林を案内した。朝日川沿いに広がるこの森には、たくさんのトチノキが自生する。蜜源の森のことを、私は「ハチ蜜の森」と名づけている。ミツバチ達は、めったに人が訪れないこんな深い森の中も、自由に飛び回り、蜜を集めてくるのだ。

静寂な森に、カラカラと葉が落ちる音が響く。変わらずトチの大木たちは、木肌にうろこ模様を配し、威厳を誇っている。この森を歩いていると、なぜかいつもじっと見られているような厳粛な気持ちになる。都会からいらした取材陣も言葉少なになった。

見上げると、色づき始めたトチの広い葉が



ら、太陽に透かし出された橙色の光が降り注いでいた。この季節にだけ感じられるやわらかな光だ。優しく、暖かく、嬉しくて、ありがたくて、ちょっと恐々で、ちょっと切ない。この森に抱かれて、私はいつも安堵な時間を手に入れることができる。

焦がれる蜜蝋のともしびをもたらしてくれる森。大切な母なる森である。

『グリーンパワー』1月号掲載（森林文化協会）

『グリーンパワー』で連載しています

森林文化協会の情報誌で、つたない作文の一年間の連載を始めました。若い頃、同協会主催の森林文化シンポジウムに出させていただいたことがありました。正直なところ連載はつらく、不得意な「である調」でもあるのですが、憧れた自然保護活動家の方々も書いていた、知る人ぞ知る自然系情報誌なのです。思い切ってお受けしました。蜜蝋や養蜂のことを書いています。ひと月遅れでホームページに載せていますので、よろしければご覧いただけましたら幸いです。



NEWS (2012. 5～2013. 4)

東日本大震災・阪神淡路大震災関係

キャンドルリンクネットワーク活動

山形と宮城のキャンドル好きな仲間達の集まり「キャンドルリンクネットワーク」のサポートの元、今年も被災地や福島からの避難者の皆さんに、キャンドル作りや点灯会を楽しんでいただくことができました。また、続けてきた神戸市の 1. 17 慰霊祭用のキャンドル製作も協力できました。担当者の皆様、繋いで下さった皆様、そしてキャンドルリンクの仲間達に大変お世話になりました。心からありがとうございました。

- ・夜空の会（山形市）
 - ・北海道東北ボーイスカウトキャンプ（山形市）
 - ・おらほの復興市（石巻市）
 - ・葉っぱ塾 森の休日（朝日町）
 - ・松屋チャリティーキャンドル製作（東京）
 - ・1. 17 のつどい用キャンドル製作
（寒河江高校・山形市たつこの保育園
山形市高堂地区 酒田市平田町）
 - ・3. 10 蜜蝋双子キャンドル作り（七ヶ浜町）
 - ・3. 11 復興への祈り（山形市）※表紙
 - ・3. 11 祈りの灯り希望の灯り（石巻市）
 - ・もうふるカフェ（寒河江市）
 - ・苺キャンドルPJ（亘理町） 他
- ※詳しくはホームページをご覧ください。

<http://samidare.jp/candle311/>



宮城県七ヶ浜町での双子キャンドル作り

点灯会では、クリスタルボールやオルガリートの演奏、花は咲くの合唱、玉こんにやくも食べていただきました。NPO 法人アクアゆめクラブ様と鈴木喜久栄様に大変お世話になりました。

エシカルウェディング

大和総研ホールディングスの河口真理子氏の推薦により、東京で行われた「エシカル・ウェディング」に蜜蝋キャンドルを採用していただきました。

アフリカの女性の自立のために栽培されたシアバターで作られた石鹸の引き出物、沖縄の絶滅の危機にあるサンゴを大切にする石化サンゴの粉末を使った生地ドレス、琉球伝統工芸の金細工職人が作った指輪・・・そして石油系ではないミツバチがもたらした森のともしびの蜜蝋。

エシカルとは、人・社会や地球のことを考えた『倫理的に正しい』消費行動やライフスタイル。エコだけでなくフェアトレードや社会貢献も含む考え方だそうです。河口氏は「結婚式という人生最良の日を世界とシェアする素敵な方法」として提案しています。

現代人に求められている「環境への配慮」と「他人を思いやる心」のまさに実践。とても光栄な機会に使用していただきました。世界中にエシカルの輪が広がることを心から願います。



キャンドルダンス

披露宴では円形に点灯された蜜蝋の灯火の中で新婦の安齋陽子さんがキャンドルダンス（イスラエル舞踏から創作）を披露なさいました。

わかちあいプロジェクト

日本のフェアトレードの老舗 NGO「わかちあいプロジェクト」様から依頼され、アルゼンチンの蜜蝋を使って製造しました。正直なところ、色が壊れ、不純物も多く精製も大変でしたが、なんとか3センチの太さまで、優しい炎を保ち、煤も出さず、流さず、灯すことができました。世界初のフェアトレード蜜蝋キャンドルに貢献できて幸いでした。



体験教室で感涙のエピソード

昨年6月の東京ガスワンダーシップ環境エネルギー館で子ども対象に行った蜜ろうソク作り体験教室でのこと。使う道具に、もんじゃ焼きのへらがあるのですが、蜜蝋にまみれたへらの表面に、竹串で「ありがとう」の文字が刻まれていました。エネルギー館のスタッフが片付け中に見つけてくれました。私もスタッフも大喜びしました。どんな立派な感謝状より嬉しかったです。励みになりました。こちらこそありがとうございました。



木工用蜜蝋クリームに採用

木材用蜜蝋クリームを製造している富山県朝日町の尾山製材㈱で、ハチ蜜の森キャンドルの蜜蝋の質の良さを認めて下さり、主材料として採用していただいております。

仕入れる蜜蝋のなかには、キャンドルに使っていない色あせや変色したグレー系、茶系クリーム系のものが出るのです。また、私の製造段階で色が壊れることも多々あります。そんな蜜蝋を使っています。

この蜜蝋クリームには、蜜蝋のほかに、なたね油、椿油、亜麻仁油、ヒバ油など、木材のプロならではの調合がなされています。フローリングの床など、子どもが直接触れる機会が多い場所に安心して使用できますし、天然成分なので、手荒れの心配もないとのこと。森の恵みの蜜蝋が森の恵みの木材や人を守るために使われるのはとても嬉しいことです。



詳しくは

<http://mitsurocream.com/>

ご紹介いただきました

- ku:nel 59号 (マガジンハウス)
文 つるやもこ氏 写真 長野陽一氏
- BISES (日本インテグレート) No. 81冬号
前田満見の小さな庭で季節の花あそび
ハチミツ色の灯り
- NIKKEI STORE 2012カレンダー
12月「森の恵みが生み出す蜜ろうソク」
撮影/竹邨章氏
- Discover Japan DESIGN vol.2 (柊出版社)
- 暮らし上手の贈りもの365 (柊出版社)
文 ナガタユイ氏
- 週間かがくる+No. 48 (朝日新聞出版)
- 東北が好き kvina×SHOE PREs
- Weekly vol276 (河北新報社)
冬の山形体験ワールド
- gatta! (ガッタハウス)
- オレンジページ
わかちあいプロジェクト/カヌレ形
心からありがとうございました。

ミツバチ育む南房総

久しぶりに大きなイワシが食卓に載り、南房総の思い出がよみがえった。私は、この大きめのいわしが大好きだ。

まだ父のもと養蜂を学んでいた二十歳頃のこと。父が入院していたから、ミツバチの越冬の仕事は、私一人であたっていた。幼い頃から何度も滞在した地とはいえ、遠く離れた南房総で、収穫期前の大切なミツバチの育成を一人するのは心細いことだった。

ある日のこと、砂糖水を与える給餌作業をしていると、年輩の男性が遠くから眺めていることに気づいた。仕事を終えて片付けをしていると、そばに寄って来て、仕事のことや出身地のことなどを質問してきた。そして、もっと話を聞きたいからと、近くの家を招いて下さった。

まだ慣れていない熱燗でもてなされながら、さらに根堀り葉堀り質問された。どんな方だったかもう思い出せなくなってしまったが、にこにこしながら「偉いね。偉いね」と、何度も何度も言ってもらった記憶が残っている。

実はその時に「何もないけどイワシがある」と、大きな一匹を焼いて出して下さったのだ。それは、脂がのってとてもおいしいものだった。それ以来私は、焼いたイワシが大好きになり、食べる度にあの年輩の方を思い出すようになったのである。

女王蜂は花の少なくなる秋になると、少しずつ産卵数を減らし家族を減らす。養蜂家は奥山からいくらでも暖かさと花の残る里山に下ろし、砂糖水を給餌して蜂数を減らさないように努める。

小規模養蜂家の山形での越冬は、巣箱を藁やスチロールで囲い、そのまま雪の中にかまくら状態にして埋めておく。ミツバチ達は、おしくら饅頭のように硬く固まり、ハチミツを少しずつ食べて体温を維持する。そして数ヶ月後、春一番の産卵で生まれた妹達を世話



した後に寿命を全うする。本来、働けばたった一ヶ月程の命を、大切な役割を担ってじっと春を待つのだ。

東北地方の大きな專業養蜂家は、概ね温暖な南房総に移動して越冬している。翌春の果樹園の花粉交配や奥山での採蜜に、より蜂数の多い満群の蜂であたるためだ。私の実家も40年以上も前から、南房総市の千倉町や丸山町、白浜町などにお世話になっている。

移動後は、すぐに餌の砂糖水を与える。すると産卵をやめた女王蜂が、春が来たと思い込み、再び産卵を始めるのだ。それなら山形でも砂糖水をふんだんに与えておけば産卵をやめないだろうと思われるが、産卵の契機を判断する大切な理由がもう一つある。それは、幼虫がタンパク源として食べる花粉である。

南房総は、冬とはいえ菜の花や切り花、ハーブなど花が途切れることはない。まだ気温が低いので、すぐには群れの蜂数を増やすには至れないが、度々給餌することにより産卵を止めないで維持することができる。そして、待望の梅が咲けば気温も上がり始め、花も増え、産卵数も増え蜂数がぐんぐん増えてくる。

そして桜が散る頃、サクランボやリンゴの花粉交配や、朝日連峰山麓での採蜜をするために山形に帰る。こんなふうに、秋までは山形の自然が、冬は南房総の自然が、大切な翌春のミツバチを育てているのである。

ちなみに蜂の移動は夜に限る。蜂が全て巣箱に戻る夕方に巣門を閉めてトラックに積み込み、夜明けまで目的地に設置し巣門を開ける。外に働きに行きたいのに行けない状態になると、蜂達はパニックを起こし、体温を上

昇させ、その熱が蜜蝋の巣を柔らかくし、こぼれ出すハチミツにまみれて死ぬ「蒸殺」が起こってしまうからだ。実は、私はイワシをごちそうになった同じ年に、このことで苦い経験をしている。

当時は、市川市のナシ畑に移動し、10日程花粉交配の仕事をしてから山形に帰っていたのだが、私はそのナシ畑への移動日を間違ってトラックに積み込んでしまったのだ。重労働な積み込みを終え、出発前にナシの組合長に電話すると、農家の皆さんが集まる引き渡し日は三日後の早朝だと告げられた。

とても深刻な事態になってしまった。なぜなら、もうトラックから下ろせないのだ。蜂の移動は3km以上が原則。それ以内だと記憶が残り、外に出た働き蜂達は前日の場所に戻ってしまう。数カ所の蜂場から積み込んだ同じ規格の巣箱を、違わず同じ場所に置くことは不可能。適当に置いてしまえば、殺し合いの戦いが全ての群れで起こる。

だが、翌朝までになんとかしないと今度は蒸殺してしまう。そうなれば、せっかく増やした蜂達を失い、花粉交配はもとより、その後の採蜜にまで相当な影響が出てしまう。

どうしようもなくなり、すぐに病院の父に連絡して判断を仰いだ。父は南房総で最もお世話になっている年輩の養蜂家島津為吉さんに頼った。若い父を南房総の地へ招き、ミツバチの飼い方を教えてくれた人でもある。島津さんは、蜂が戻らない3km以上離れた場所の地主にすぐに交渉して許可を取り付けて下さった。さらに、深夜にまで及んだ蜂を下ろす作業まで黙々と手伝って下さった。おかげでことなきを得ることができたのである。

両親以外の方に、あんなにお世話になったのは生まれて初めてのことだった。本心から抱いた感謝の念も、おそらくあの時が初めてだっただろう。

南房総はミツバチ達を育み、私までも育ててくれた大切なもう一つのふるさとである。イワシを食べる度に胸がキュンとする。

『グリーンパワー』4月号掲載（森林文化協会）

蜜ろう利用術⑫

蜜ろう引き紙



兵庫県にお住まいの岩田聖子さんは、ハチ蜜の森キャンドルの蜜蝋を使ってろう引きをなさっています。ある日、蜜ろうが染み込んだカード入れが届きました。噂には聞いていましたが、初めて本物を拝見してその優しい手触り感に感激しました。

ビニール袋のなかった時代、こうして大切なものが濡れるのを防いでいたことを実感しました。石油製品がなくても人間は素晴らしい知恵や技を持っていたのです。エネルギーを真面目に考えなければならぬ今、未来に向かい大切なことを教えてくれる逸品だと思いました。

工房では、写真家でもある岩田さんの撮影されたポストカード5枚を入れて販売しております。私の蜜ロウソクも撮影していただき、2枚含まれてあります。蜜蝋引きのカード入れは使い続けることによって味わいのある風格になるそうで、ケースのまま持ち歩いて、ちょっとした時間にお便りを書いていただきたいとのことでした。

また岩田さんの考えで、売上は被災地への義援金にしたいとのことで、昨年末は宮城県亘理町の復興花火打ち上げの協賛金として寄付下さいました。なにもかも素晴らしいです。

詳しくは岩田さんのブログを、「skywind201203」で検索してご覧下さい。現在はブックカバーの製品化も計画中だそうです。

ハチ蜜の森料理店③

カボネード

柏倉伸明さん美沢さんご夫妻は、震災を機に横浜から朝日町に引っ越されてきました。町に貢献したいと、積極的にイベントに参加したり、町のことを取材してブログで発信して下さっています。ハチ蜜の森キャンドルにも取材に来て下さいました。

その時に、美沢さんの大分県のご実家で作られた「カボス」をたくさんいただいたのです。しかも無農薬とのことで大喜びしました。実は、これを皮ごとスライスしてハチミツに漬け込むのです。瓶の中で、カボス酵母とハチミツ酵母が出会い、数日後にはおいしいカボネード発酵液ができます。レモネードより香りが上品で、ホットでもアイスでもおいしくいただけます。冬じゅう、何度もハチミツを足して楽しんでおりました。ごちそう様でした。柏倉さんのホームページは、「朝日町 shell のブログ」で検索して下さい



ハチ蜜の森文庫⑮

■つるばら村の魔法のパン（講談社）

茂市久美子・作

人気のつるばら村のお話がついに10巻で完結しました。実は、7年前に出された『つるばら村のはちみつ屋さん』の主人公ナオシさんは、幸せなことに私をきっかけに書いて下さったのだそうです。私は飛び上がるほど大喜びしたのでした。

さて、ずっと気になっていたナオシさんとパン屋のくるみさんは、おかげ様で結婚することができました！なんだか自分のことのように嬉しいです。茂市さんお疲れさまでした。そして素敵なお話をありがとうございました。



後記-----

高校生の頃に憧れたロックシンガー浜田省吾が、30年前に作った曲をまた歌っています。人気バンド「ミスチル」の櫻井和寿もカバーして歌っています。現在を鋭く表した反原発の歌なのです。

僕と彼女と週末に ※一部抜粋（ ）は意味

この星が何処へ 行こうとしているのか

もう誰にもわからない

力と力のシーソーゲームから

降りることさえ出来ない

人は一瞬の刹那に生きる

子供達は夢見のことを知らない

昨日の絵具で破れたキャンパスに（時代錯誤・利権）

明日を描く愚かな人（政治家・官僚）

売れるものならどんなものでも売る

（発電所の乱立・輸出）

それを支える欲望（経済界そして国民）

恐れを知らぬ自惚れた人は（開発者・電力会社・国）

宇宙の力を悪魔に変えた（原発・核兵器）

いつか子供達にこの時代を伝えたい

どんなふうに人が夢をつないできたか

君を守りたいこの手で

愛を信じたいいつの日か

国民の多くは、腹をくくり生活レベルを押さえてでも原子力発電所のない未来を望んだはずなのに、国はまたお金をばらまいて「景気いいほうがいいでしょう。無理しないで電気使おうよ」と誘ってくる。「それもそうだ」とまた世論は動いてしまう。使用済み核燃料はリサイクルできず、核のゴミは行き場もない。何万年後の子孫まで危険と負担を遺す。なにより、福島第一原発は未だに空にも海にも放射性物質を出し続け、未だに避難者家族を切り離したまま救えてはいない。やっぱり私はいらぬ。広島・長崎・福島を知る日本だからこそ自然エネルギー開発と生活の価値観変革を目指すべき。それは、「今でしょ」。

通信ご購入について

- ・ 定期購読を希望される方は、400 円分の 80 円切手をお送り下さい。（およそ 5 年分）
- ・ 購読期限は、お送りした時の封筒の住所下に、たとえば 25-35 と号数を明記しています。